青森県立高等学校魅力づくり検討会議上北地区部会（第２回）概要

日時：令和５年１２月１８日（月）
９：３０～１２：００
場所：三本木高等学校　会議室

＜出席者＞
上北地区部会委員
岩川　亘宏 地区部会長、丸井　英子 地区部会副会長、太田　浩之 委員、
小笠原　理高 委員、新堂　善史 委員、前田　智子 委員、前野　幸子 委員、
三浦　真 委員

１　開会
外崎高等学校教育改革推進室長から挨拶があった。

２　事務局説明
地区部会における検討の進め方について
事務局から、資料２及び資料２の附属資料について説明した。

３　意見交換
地区部会における検討の進め方について学校・学科の充実の方向性（整理案）【たたき台】について
事務局から、押さえておくべき基本的な事項等として、これまでの会議資料について説明した。

＜これまでの会議資料＞
・7/7 検討会議（第２回）資料４「学校・学科・教育制度等の現状」
・8/7 第１分科会（第２回）資料４　附属資料①「各校のグランドデザイン」
資料４　附属資料②「各校の教育活動の状況」
・10/5 第１分科会（第４回）資料２「高等学校教育に関する意識調査（速報）」

Ⅰ　魅力ある高等学校づくりに向けた基本的な考え方
事務局から、資料３の全体構成と、「**１　検討に当たっての視点**」、「**２　求められる力と人財像**」及び「**３　県立高等学校教育の方向性**」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（検討に当たっての視点）

○　１ページの「１検討に当たっての視点」＜急激に変化する社会における本県ならではの高等学校教育＞の、○の５つ目、本県に即したトピックの検討が必要ということで、具体的に５点ほど挙がっていたが、もう一度確認したい。

→（事務局）ＳＴＥＡＭ教育、アドバンストラーニング、セルフレギュレーション、グローカルリーダー、ＤＸ。

（県立高等学校教育の方向性）

○　ウェルビーイングの実現というところで、具体的に現状満たしていない部分はどこになるのか疑問を持った。県立高等学校教育の方向性の中に【ウェルビーイングの実現】があることは、現在は満たしていないということにもなってしまうので、どういったデータからこういう言葉が出てきたのか。

　また、フィジカルウェルビーイングなのか、メンタルウェルビーイングなのかといったウェルビーイングの概念についてはどうか。

→（事務局）会議の中で委員から発言があった部分ではあり、特定のデータ等を基にした意見ではないという状況。

Ⅱ　これからの時代に求められる学科等の充実

事務局から、資料３「**１　全日制課程　（１）普通科等**」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（普通科）

○　以前、上北地区統合校の開設に関わった際、職業教育を主とする専門学科に在籍している生徒の方が「充実感や様々な体験活動に対する楽しさ」を感じているように見えた。普通科では、大学進学を意識した場合、やはり受験に向けた勉強をしなければならず、普通科における魅力づくりの難しさを感じた。子どもたちに主体性を育てることが重要であると考えており、体験活動をはじめ、自分で様々なことを想像しながら主体的に行動できるような取組を行う方向性とすることができれば、普通科においても魅力ある教育課程を編成することができると考える。

（表現科）

○　今の子どもたちはコミュニケーションが不得意で自己肯定感も低く、自分をアピールするのも苦手であると感じる。以前国際交流活動の一環で視察したニュージーランドの学校では、舞台のある教室もあり、そこで自己表現をするような授業があった。日本でも知の部分を学ぶだけではなく、もっと自己表現をする場があってもよいと考える。

事務局から、資料３**「１　全日制課程　（２）職業教育を主とする専門学科」**と**「（３）総合学科」**について説明した。

委員から次のような意見があった。

（全体）

○　資料の中で「様々なトピックへの対応が求められる中、本県としてどのトピックを強調していくのか」という意見があったが、基本的な考えは「全てのことに対して一生懸命頑張ろう」というような記載となっており、結局はコミュニケーション能力等、普通科でも職業教育を主とする専門学科でも全ての学科において生徒に対して目指すところは一緒ではないかと考える。

　ただ、普通高校より商業高校のほうが教育課程の編成の面で、生徒の力を柔軟に発揮させられるような状態にある。普通高校、特に進学校は受験科目の関係で、同じような教育課程となっているため、様々な学科を設置することで、それぞれの特色を出している。

○　総合学科だけなく、専門高校のところでも地域の関係機関や産業団体等の連携についての意見が出ていたが、連携については必須だと考える。学校だけで活動を完結しようとしても、やれることに限界があり、地域にとっても高校生に手伝ってもらえたらという思いもある。高校生が開発した商品を実際に商品化して販売した地域の方は、「高校生が関わった商品というキャッチコピーをつけることにより売れ行きが違ってくる」と話しており、それくらい地域の方も高校生に期待している。

○　県内６地区の中で上北地区が一番子どもが減っている比率が高く、学校を残して欲しいと言っても、少子化が前に立ちはだかるのが現実。上北地区統合校である三本木農業恵拓高校においては、六戸高校や十和田西高校で行ってきた特色を組み入れてくれていると思っており、高校が再編になっても、特色や学びを引き継ぐことは可能であると考える。

（その他（職業教育を主とする専門学科全般））

○　１６ページの【教育内容】の○の１つ目に、「小学生から様々な体験プログラム等を構築できないか」という意見があったが、十和田市では小学校においてキャリア教育を目玉として取り組んでいる。しかし、中学校においては高校受験がある関係で、体験活動が縮小し、高校においても学校や学科によっても差があると思う。

○　ＰＴＡの県大会において講演会を実施した際、講師の方の体験談等を聞くことでＰＴＡの方々は皆元気をいただくことができた。学校においても文化祭等以外でも講演会を実施するなど、日本のリーダーとなっているような方の話を聞く機会があればよいと考える。
○　高校において、各校では年１回程度は様々な方を講師として招き、講演会を実施している。講師に関しては予算の関係もあり、地元の方にお願いすることが多い。
○　講師に関しては地元の方でも、地域で活躍している方でもよいと思うが、そのような方を講師として招く際に、人材リストのようなものはあるものか。
○　十和田市教育委員会では人材リストを作成している。
→（事務局）人材バンクのようなものはある。また、出前授業といった県の事業や、校長会が主体となった事業等の活用により、様々な講師を招いて、講演会を実施している。

事務局から、資料３「**２　定時制課程**」及び「**３　通信制課程**」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（定時制課程）
○　中学校には学校になかなか登校できない生徒もおり、そういった生徒が高校進学を目指す際に、定時制・通信制課程が大事な役割を果たしている。本校でも、別室登校であった生徒が三沢高校の定時制課程へ進学し、様々な体験をしながら、今は学校に通えているといった事例が多く見られ、定時制課程の必要性を感じるため、上北地区に定時制高校も残して欲しい。

（通信制課程）
○　現在、上北地区には通信制課程がないが、現在の設置校のみでも何とかやれており、上北地区への設置は少子化の現状を考えると難しい。

（全体）
○　本校を含め全日制課程の高校においても、今は障害のある生徒が入学してきており、そういった生徒に対して、担任・学年主任・養護教諭・教科担当等でバックアップしながら指導に当たっており、教員の負担が非常に大きくなっている。通級担当の教員の配置や、特別支援学校との連携等による指導の仕組みづくりが必要。

（その他）

○　２１ページのその他の【学校・学科の設置】の○の１つ目に、「岩手県安比高原に開校したハロウ・スクールを参考としてはどうか」という意見がある。私は三沢基地で働いており、単身赴任で岩国から三沢に３年間来ていた同僚がいたが、家族と一緒に暮らすために沖縄に転勤していった。その同僚が「軍人であれば軍人の家族は基地内の学校に無料で通うことができるが、そうでなければ円レートによっても変わるが、２５０万円～３００万円といった高額な学費になってしまう。アメリカンスクールのほうがずっと安いため、三沢にも小規模でもアメリカンスクールがあれば、需要があるのではないか」と話していた。

また、全て英語で授業をするような高校が今はないが、そういった経験を与えることで、飛躍的に語学力等も伸びると思うので、グローバル関連学科等の設置も含め、検討の余地はあると感じる。

○　半年ほど前の毎日新聞で「全国で商業学科がなくなりつつある」、「普通科と再編し、特色を生かして共存している」というような記事を読んだが、そういった流れがあるのかどうかお聞きしたい。

→（事務局）令和５年度から令和９年度までを計画期間とする第２期実施計画を実施しているところであるが、この中で、商業科について、学級減は予定していない。令和１０年度以降のことに関しては、現在会議の中で皆様から御意見をいただきながら検討を進めていく。

○　新聞等では統合の良い面について主に記載するが、実際は教育課程が学科によって異なるため、異なる学科を有する高校の統合は、学校行事が一緒にできなくなる等といった課題もある。

Ⅲ　多様な教育制度

事務局から、資料３「**１　中高一貫教育**」、「**２　全日制普通科単位制**」及び「**３　総合選択制**」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（中高一貫教育）

○　少子化と併せて、中学校卒業後の進路選択や部活動等において多様な考え方が広がっており、倍率は下がってきているものの、中高一貫ということで、附属中学校は保護者や生徒のニーズは大変高く、継続しての存続をお願いしたい。

Ⅳ　各校の特色ある教育活動の充実に向けた取組等

事務局から、資料３「**１　特色化の推進**」、「**２　多様な主体との連携の推進**」及び「**３　小規模校における教育活動**」について説明した。

委員から次のような意見があった。

（全国からの生徒募集の導入）

○　生徒数が少ない地域の中で、生徒を奪い合っていても、根本的な解決にはつながらず、やはり入学する生徒の分母を増やすことが大事であり、そのためには全国募集に本腰を入れていかなければならないのではないかと考える。全国募集のＰＲのため、地域みらい留学主催のイベントで、学校の情報を発信するという手段もあるが、イベントブースを構えるには予算が必要で、全国募集を導入しなければならないような小規模校にとっては財政的に厳しいため、全国募集の導入に当たっては県教委による予算化も検討していただきたい。

→（事務局）現在、全国募集を５校で行っており、地域みらい留学の参画費を県費で措置している。委員の御意見としては、全国募集に関しては拡充が必要で、拡充に当たっては地域みらい留学への参画と県教委による参画費の負担が必要というイメージでよいか。

○　よい。

○　本校には他県の高校を受験する生徒もおり、特色ある高校であれば、保護者も一緒になって高校に関して調べ、生徒の受験とともに保護者も県外へ一緒に行くという事例もある。よって、本県でも特色のある高校があれば他県からの入学生も増えるのではないかと考えるため、全国からの生徒募集の充実の視点と、特色ある高校にしていくための取組の充実を図った上で保護者の転居を要件とする受験手続きの簡略化等の２つの視点を持つことが必要と考える。

（ＩＣＴの活用による教育環境の充実）

○　ＩＣＴの活用による教育環境の充実は大事である。また、ＩＣＴの活用だけではなく、ＩＣＴそのものを学ぶ学科も必要であると考える。ＤＸに関して子どもたちはすごく興味を持っており、ＩＣＴに関して学ぶ学科で学習した知識を、例えば配送業や農業等の分野に生かしていきたいという子どもたちが多くいるので、令和１０年度以降の学科として大事になってくると考える。

（高等学校同士や異なる学科間の連携）

○　人口減少が進んで、学校の再編は避けられない状況にあると思うが、２８ページの「（１）高等学校同士や異なる学科間の連携」のウの○の３つ目「県内の地域校コンソーシアムを構築することから検討」と、エ【重点校の特色化】の「大学や関係機関とのコンソーシアムを構築」という意見に関して、コンソーシアムによる連携は非常に良いことだと思うが、具体的にこれはどういった形になっていくのか。活動を共に実施する等、そういう形なのか。

→（事務局）そのイメージで良いと思う。こちらもこれまでの会議の中で委員から出された意見であり、事務局としてどう進めるかということではないが、地域校における生徒数が少なく、集団の規模や教員数といった課題に対して、地域校同士での連携により教育活動の幅が広がるのではないかといった御意見だった。

（小・中学校との連携）

○　実際に工業高校でのものづくりや、農業高校での農業体験等において小学生を受け入れてもらっており、連携によって、子どもたちは高校というものを意識し、進路選択に大きく影響するほか、将来の職業にも繋がっていくものと考えるため、これからも積極的に受け入れて欲しい。

○　高校と小・中学校との連携はとても大事だと思う。私の時は、小学校のうちから「将来こうなりたい」というものがあり、中学校で入学したい高校を決めて進学する生徒が多かったと思うが、今の子ども達は「何となくこうなりたい」はあったとしても、それで高校を選ぶことがなかなかできないのではないか。そこで、小学校のうちから将来を考えられるような体験をすることにより、中学校で目指す方向を決めて高校を選ぶことが大事であり、できるものは小学校のうちから取り組ませることで、早い段階で自己肯定感も高められると考える。

○　中学生でもきちんとしたビジョンを持って進学先を決めている生徒はいるものか。

○　本校であれば、明確な夢や目標を持っている生徒が約７０％で、そうでない生徒はとりあえず普通科に進学し、そこで考えようという生徒が結構いる。

（小規模校における教育活動）

○　以前、中里高校に勤務していた時、北海道の函館近辺の小規模校を数校視察し、話を伺ったところ「小規模校の維持に関してどのようにやればいいのか、こっちのほうが聞きたい」と言われた経験があり、どの都道府県でも小規模校の維持は難しいことであると感じた。

○　小規模校のメリットは、「全職員が全生徒の顔を覚えている」、「少人数制による手厚い指導ができる」等、資料にも書かれているとおりであるが、小規模校だからできなくなることもあると思うので、何かを得るためには何かを諦めなければならないという現状とどう向き合っていくべきかが課題と考える。

○　かつて六ケ所村内に高校がなかった時代があり、高校に進学したくてもできず、子どもを３人育てながら三沢高校の定時制に通って卒業したという保護者の方のお話を伺った。公共交通網が発達していないなど、通学できない事情のある子ども達にとっては、地域に小規模であっても高校があることは大事だと強く感じた。小規模校のメリットは、見方によってはデメリットであるという意見もあったが、どちらを取るかといった時には、通学できない子ども達のことを考えて欲しい。

○　大学進学について、今共通テスト以外の受験方法、総合型選抜の割合が増えてきており、小規模校においても進学を希望する生徒に対して、教員がバックアップして指導することで、合格できる時代になっている。そのため普通科の進学に重点を置いている高校でなくとも、大学進学もできるし、就職もできる。そういう意味でも、小規模校だから学力が身につかないということではないが、生徒数が減少したから統合するという流れを止められないものかと考える。

（その他（特色化に向けた取組全般））

○　３２ページの「４その他」の○の２つ目に「県立高校ではなく私立高校を選択する生徒が増加していると考えられる」という意見があるが、私立高校の状況に関する資料が少ないので、私立高校と県立高校との調整や、現状がどうなっているのかを事務局にお聞きしたい。

→（事務局）私立高校については、それぞれが独立して運営されているという部分がまずあり、この会議では、県立高校の在り方ということで検討をお願いしている。

　県立高校と私立高校での調整という部分では、年２回協議会を行い、募集人員等について協議している。

○　人口減少に伴い学校がどんどん閉校になっていると思うが、かつて日本の人口が増加している時には、分校から始まって学校をつくっていったと思うので、逆に今の人口が減少していく中においては、サテライト校のような形で学校を残すことはできないかと考える。スクーリングにより、必要な単位だけ違う学校に行って学ぶことや、ＩＣＴをうまく活用して必要な単位を取得すること、単位互換制度等もうまく活用しながら、小規模化していく中にあっても拠点となる学校を残していけば、地域の子ども達が進学できるのではないかと考える。

Ⅴ　第２分科会での検討における留意事項等

（高等学校の再編整備）

○　上北地区はエリアが広く、通学費等の面で、通学が難しくなってしまうこともあるため、上北地区にある工業、農業、商業高校をなくさないで欲しい。

部会長から、上北地区部会の委員構成について、追加の必要の有無等を確認した。

委員から次のような意見があった。

○　ビジネスや卒業後の就職先といった視点を持つ方がいてもよいと考えるため、企業の方を１名追加してはどうか。

→（地区部会長）ただ今いただいた意見に関しては、事務局と相談の上、決定したいと思うがよいか。

（異議なし）

以上のとおり、地区部会長と事務局で相談の上、決定することとした。

３　閉会